

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和七年八月作品集

庭に歴史

大畑 恵

庭に歴史、と言うと少し大袈裟かもしれませんが、私にとっては歴史そのものの家です。この家に引越して、子供らは庭を走り回り賑やかに過ごしました。そして、一人づつ順番に家を出て行き、庭はいつの間にか寂しくなりました。私は少しづつ耕し、花や木を植え始めました。まず薔薇、クリスマスローズ、百合などいろいろな花。次に、ブルーベリー、桃、梅など実の生る木。そうやって少しずつ増やしていくうちに、庭は花や木で一杯になりました。庭を眺めて俳句を詠んでいます。同じような句で進歩はありません。でも、今年も薔薇が咲いた、ブルーベリーが青く色づいた、と季節を樂しませてもらっています。この庭で過ごして、もう四十二年になりました。小さかった木々が見上げるようになり、過ぎていった年月を感じます。古希を過ぎ、いつまで庭仕事が続けられるか分かりませんが、元気でいられたらと願っています。

息子らの声の聞こゆる春の庭

松雪草零れ種から芽吹きけり

春蘭の庭隅に咲き二十年

赤椿落ちたる花も美しく

木の蔭のいつもの場所にえびね蘭

赤き牡丹白き牡丹と咲きにけり

薔薇散つて寂しくなりぬ庭の先

庭仕事の手を休め聞く杜鵑

卯の花を道行く人の見上げをり

百合の花植えつばなしの花の色

《作品鑑賞》

すみれ

「庭の歴史」とても共感できてひと花、一木に思い出がっぱいあることでしょう。私の庭もその様な思い出が溢れていて、草取りも人に任せられない程でした。きつと恵さんもそうかなと思います。読んでいただきました。

松雪草零れ種から芽吹きけり

また隅に咲く春蘭やえびね蘭まで植えておられる恵さんの植物愛に惹かれ、庭にお伺いしたいと思う程です。

春蘭の庭隅に咲き二十年

木の蔭のいつもの場所にえびね蘭

四季折々の花に心を寄せ楽しんでいる様子がうかがえ、これはあの時植えた花だと歴史を語る木々の様子が目に浮かびます。

赤き牡丹白き牡丹と咲きにけり

薔薇散つて寂しくなりぬ庭の先

それぞれの句に花の味わいがよく現れて素敵な作品に出合せて頂き、これからも庭仕事を楽しまれる恵さんにエールを送りたいと思います。

青梅のずつと向うに鶯の声

南風や古墳のあたり声のして

古墳越す風が通れる大夏木

墳丘墓青菜の谷を相隔て

伯耆から出雲へと入る盛夏かな

茶の涼し青垣山を見てをれば

かなかなや川の向うの家近し

蟬旺ん我有るときも無きときも

耳に入る飛行機の音夏の風

日覆を上げて見てゐる神の山

逃ぐるとふこと未だ知らず雀の子

朝蟬の声降る樹下を歩きけり

よき声の出るやうになり鶉の子

強くまた弱く強くと蟬しぐれ

矢ゆるとて何かとけふも外に出る

片蔭を辿つてゆけりビルの街

図書館の裏庭えこの実の涼し

風死せり大橋までの道長く

夏の宵花火を待てば風の出て

前山に日の昇りくる浜万年青

息長く次々潜る川鶉かな

茗荷汁作れば旨し昨日今日

網戸越し白き朝月眺めけり

冷素麺すする手首の細くなり

一陣の朝風涼し坂の道

満ち潮の魚を啄む川鶉かな

軒いづばい色深めたる牽牛花

盆の月映してゐたる瀬戸の海

盆の客昔話に花が咲き

あちこちで鳴いていつしか虫時雨

佐保光俊

高尾ひとみ

あぐみ

かけのぼるフルートの音夏の夕

騒がしき小学校のプールかな

一匹の螢を採す箱の中

涼風やショーウィンドウ見て歩く

暑き日の診察台で医師を待つ

並べたる鉛筆の横汗拭ひ

絶え間なき冷房の音夜の電車

月涼しトランペットの音聞こゆ

アスファルトに触るる音して夏落葉

八月や樟に一羽の鴉居て

亞矢

夏蝶の時に寄り来る木蔭かな

一本の百の態蟬盛んなり

灯台へ心急かるる茂りかな

海に出てどつと吹き出す玉の汗

引き潮の大鳥居まで跣足かな

足裏を返せばこぼれ朱夏の砂

白日傘我が子へ高く差し掛くる

揚花火子は青年の顔となり

甚平を着れば夫と子似通へり

桃好きな子らに囲まれ桃を剥く

綾乃

サルビアの花に見入りて昼となる

カーテンのまま聞いてゐる朝の蝉

我が庭の蝉一頭の鳴きにけり

犬が居て妻が居てこそ大夏野

見渡せる山山山の滴れり

糸島の潮の香濃ゆき裸の子

口開けの客となりけり夏暖簾

風鈴の音色かすかや能面展

鮎食うて障子の外の瀬音かな

朋友と歩く川辺や青芒

井藤希

浜木綿の香り漂ふ朝ぼらけ

真つ青な空に響いて蟬の声

真つ白な百日紅咲く車庫の上

百日紅ことし殊更美しく

藍莓のジャムを帰省の子に持たす

富士山の全てを覆ふ驟雨かな

生身魂人生樂しと白寿なり

観劇の余韻残りて三日の月

気がつけば無花果熟れて朝の庭

今年また無花果のジャム作りをり

大畑恵

備中路峽にあまねく青田波

城壁と紛ふ石垣夏館

夏蝶のはやも来てゐる明けの庭

何もせでまた来し夏の蝶眺む

コンビナートの煙遠くに花海桐

賑やかに将棋指しをり帰省の夜

降つては止みまた降つて止む蟬しぐれ

雨脚のはや遠のいて令歡の花

夕風や盛りの過ぎし百日紅

車窓から秋立つ波を眺めたる

暁子

夏の蝶蔭から空へまた蔭に

初蟬や朝の身支度整へば

洗ひ物してゐる窓に蟬しぐれ

遠嶺より青空に立つ雲の峰

寄せる波引く波を追ふ蹠かな

夕闇のはのと明るき百日紅

驟雨来てしばらく店の軒下に

手の汗を拭ひまた杖持ち直す

夜の驟雨行く道規制されてをり

両側を夏霧覆ふ国ざかひ

すみれ

ランドセル下ろして追へり夏の蝶
 蟬の穴小枝差し込みるたりけり
 伸びしても届かぬ高さ蟬の殻
 白蓮に動くもの居て覗きたり
 忘れ物して炎天の橋戻る
 帰り道いつも西日に向かひたる
 一口目の白玉そつと揃ひたり
 一人飲むビールの苦さ持て余す
 隠れたる青き実見つけ秋近し
 草も木も上手行く人も喜雨の中

知佳子

駐車場きれいに掃いて梅を干す
 家中の箆を集めて梅を干す
 幼子がそつと干梅触れてをり
 お喋りをしながら友と田草取る
 子は畦で遊んでをりぬ田草取
 もう一度隣の凌霄見て帰る
 朝蟬やババに抱かれて保育園
 明日には夕顔の花開きさう
 朝顔の二階に向けて咲いてをり
 萩の花トンネル抜けて故郷へ

ちどり

かなぶんの腹を見せたる朝かな
 産土の森の涼しき風の来る
 遠山に夏雲の湧く車窓かな
 大橋で県境越ゆる盛夏かな
 炎天を遍路姿の行き過ぐる
 海底のトンネル抜けて雲の峰
 夕風に小鳥の声の大暑かな
 石垣に隠るる蜥蜴尾の青し
 晩夏光モンマントルの丘に似て
 桔梗咲き薄暮の風の吹きにけり

辻純江

夏川の静かさの中沈下橋

我慕うてか揚羽蝶今日も舞ふ

正座して口に入れたる水羊羹

犬逝きて沈める友に百合の花

白餅の人見て母と見紛ひぬ

縮好きの母懐かしみ畳みをり

隙間から聞こえてきたる油蟬

背の丈の葉に分け入りて茗荷の子

帰省子を迎ふる馳走試作せり

三つ四つ風船葛揺れてをり

雲雀

水底は空気の如し山清水

泉湧く肥えたる鯉の影過ぎる

素麺を流す円卓大家族

ひたむきに湯水を飲む黒揚羽

光沢を振りまく金の黒揚羽

毒雨過ぎて鳥居の石畳黒し

夕立のミルククラウン露天風呂

風向きの変わる炎昼活火山

炎熱にペイルピンクのペンキ割れ

庭園の坂道折れて白日傘

ふじ女

藻の花を雁木に掬ふ流れかな

大池に手繰る葦や波を立て

朝涼しプラタナスの葉ひるがへり

庭に来て二階まで来て揚羽蝶

解体の家を見てゐる白日傘

端居して雲の行方を見てをりぬ

面談へアイスコーヒー飲み干して

夏座敷歩けば足裏キユキユと鳴る

一湾を海霧の覆ひて朝六時

布袋草群れて流れを変へてをり

松田裕子

プランター道に並べて水を撒く
塀越しに生れる柘榴や手を伸ばし
緩やかに半旗靡いて広島忌
連綿と語り継ぐべし原爆忌
夕風の川辺の店にひとりをり
夕風や島に蜩鳴いてをり
群青の空となりけり盆の月
初秋風犬と並んで散歩する
秋の夜や懐かしき友電話せり
湯水に新豆腐切る朝かな

村上正人

太陽の高さが好きと夏の蝶
庭先に手折り擬宝珠の仏花かな
あぢさゐの褪せて未に残る酒
初蟬の去年比ぶる日記かな
朝蟬や厨の窓を開け放ち
鳴き止みて日の斑を渡る蟬の影
噴水の丈の上下を子が走る
公園は静かなる昼極暑かな
見開きの新聞顔に午睡かな
脱ぎ捨てる洗濯物へ草いきれ

森口良樹

待合に扇子の音の微かなり
よもやまの話の止みて蟬時雨
空蟬をそつとつまみて眺めけり
千年の杉に夏蝶来て巡る
向日葵の一つ残らずこちら向く
少しづつ葉進みて夏終る
久々に雨音聞こゆ秋の入り
唐黍の粒瑞々し齧りけり
葉とし肉桂に秋香りけり

秋楡

蘭へ風の吹きしてふ道松太く

夾竹桃吾は乳飲みの引揚者

傾きてなほも景光の川蜻蛉

てのひらに豆腐切らんとすれば蟬

あらもうと萩に止まりし二人かな

鬼灯を鳴らしてみせる姉の口

鬼ノ城の秋風とどく心礎かな

常よりは疾く飛び立てり秋の蝶

蒜山へ踏み出す一步花野晴

パルクールでききうな屋根夏の宵

パトカーのサイレンこだま夕焼空

早いきれ各停のみの停まる駅

夜濯ぎや作業着の泥落としたる

不揃いのおにぎりつめて夏燕

亜化石のオークの影や蟬しぐれ

夏の果付箋を入れたままの辞書

万博の記念切手や夏木立

茄子詰めた鞆とともに汽車揺られ

梅雨明の日の出を待てり橋に立ち

水溜まりへ長靴入るる子夏の空

朝剪りし花に露あり夏点前

鍬形虫を採りて仕事に向かひし日

庭の木に来て鳴く蟬を数へけり

まどろみに蟬鳴き止みしと氣付く昼

信子を曲がりてもまた雲の峰

打水やふと見上ぐれば西に月

抱きし子が吾の夏瘦に氣がつきぬ

今井淳子

竹田千紘

今

浜の宮へ人の行き来や蟬時雨

夕暮の電線にずらり夏燕

玉の汗しきりに拭いて野球観る

捕手の背の数字に差せる晩夏光

ふと誰か居さうな気配夜の秋

山の端に雲の流るる秋まつ日

新涼や抽斗一つ整理して

窓開けて家中抜くる早稲の風

種採つて零るる種を服に受く

山野ウタ

大股で歩いて行くか南風

ノンアルで父と乾杯夏の夕

蟬の声だんだん強く聞こえる

あそこだよ蟬の脱殻吾子に指す

炎天やペットボトルの蓋回し

大暑かな行く道に影一つなく

ラボットを抱けばつづらな目の涼し

硝子戸のいつもの守宮けふはまだ

土肥律子

建物の影で人待つ酷暑かな

水嵩も音もたくまし雨後の滝

滝浴びて束の間岩に座す一団

煮花果や好みし亡夫へ届けらる

師の句集読み返したる夜長かな

大原良子

日照草子は都より帰り着く

百合の束ベーターベンを弾きし子に

碑に夾竹桃の小さく咲く

起立して国歌を唄ふ終戦日

海峡を越えて故郷へ墓参り

高嶋絹代

石垣の間にこぼれ水引草

水引草ばかりを生ける花瓶かな

爪切りの手もままならぬ夏の夜

夕立の来さうな気配戸締りす

紀英子

広島の川に向かひて歌ふ夏

日が差せば強くなりたる蟬時雨

帰り来て座布団枕に昼寝かな

盆帰省もうじき列車着く頃か

熊谷ゆり子

片陰に並び電車を待つてをり

ハンカチで保冷剤巻き首に当つ

夏の夕断捨離終へて足るを知る

驟雨去り履物を干す日暮どき

桜陽

名を知らぬ路地の古木や蟬時雨

この坂のこの木は今日も蟬時雨

レジ袋指に掛けゆく炎暑かな

夫の墓呟きながら洗ひたる

志路猿

大皿に小さく盛つて夏料理

幼子の舌見せ令うてかき氷

一斉に寺の鐘鳴る広島忌

歩道橋二人で歩く晩夏かな

撫子

米を研ぐ厨の窓に夏の月

その光も盆灯籠の並べられ

赤蜻蛉群れて田園飛んでをり

稲粟の一日雨に濡れてをり

美耶

片陰を行くために待つ信子機

扇風機触るる子の手に綿埃

隣家でも歓声上がる遠花火

乳飲み子のじつと見てゐる遠花火

山崎桂子

初秋の廢線跡を辿りけり

鶺鴒にアスファルトのまだ熱きこと

秋燕群れ翺る吳の空

上島康子

赤んぼのよく眠りをり瓜の花

日盛やつなぎ合はする小さき布

白桃の半分づつを子と食ぶる

桑門わかこ

空蟬の一枝の梱むブロック塀

蜘蛛の子の自由自在に跳びはねて

この度も音のみに知る大花火

高梨英子

夜明け前拝礼の列原爆忌

雲の峰傷きまっ雲の上に雲

白桃を食べてみるかと兄が問ふ

民

十華の膝丈に伸び庭の陰

夏の日の空雲空気眩しくて

橋下に小魚の群れ夏の川

みさ子

城眺め堀を眺めて盆休み

廟所奥声揃ひたる秋の蟬

二人して黙してゐたる残暑かな

やす保

早朝から祈りに暮るる原爆忌

長雨の止みたる空に草いきれ

古川廣子

夏休み子供の声が冴して

プールでも馴染みはみんな高齢者

弥生

令和七年七月度作品集より

亜矢 私の選んだ十句

古墳見て廃寺跡見て清水汲む	佐保光俊
夏曉の川の静かに流れけり	高尾ひとみ
子の遊ぶ傍の噴水高まりぬ	あざみ
四葩咲く夫の見舞を日課とし	辻純江
七月の色となりけり瀬戸の海	森口良樹
せがまれて餃子を作る夏の夕	土肥律子
裏庭に小粒の枇杷のたわわなり	大原良子
蟬の声頬杖ついて聞いてをり	やす保
宮島の路地裏を行く梅雨晴間	桜湯
さくらんぼ爪の形は母親似	山崎桂子

知佳子 私の選んだ十句

桑の実を口に見てゐる夜見嶋	佐保光俊
梅雨きざす鳥も草木も静まりて	高尾ひとみ
散るときは湾に明るき大花火	あざみ
ビルの間にドクタージェロ―梅雨あがる	亜矢
牡蠣殻の匂つてゐたる海開き	綾乃
一木に群れて止まらぬ夏の蝶	井藤希
夏の花とりどり咲かせ路地に住む	暁子
紫の夕焼雲を見てひとり	辻純江
夕立くる傘持ち行けと母の声	村上正人
家居してカウチに聞ける遠花火	森口良樹